

# 平尾山古墳群雁多尾畠第2支群

## —KDDマイクロ中継所建設に伴う—

1990年3月

柏原市教育委員会

## はしがき

柏原市の東山一帯に分布する平尾山古墳群は、古墳時代後期の古墳を中心に、2,000基近くに達すると考えられています。しかし、昨今の開発ブームにのって、山麓部だけでなく、山間部にも大規模開発の波が押し寄せています。また、土砂の不法投棄も多く、自然環境の破壊は著しいものがあります。柏原市では、東山総合開発計画として、野外活動施設や観光農園、古墳公園などを取り込んだ開発計画がありますが、その計画が具体化しない間に、開発がどんどん進められている状況にあります。そのために消滅した古墳も數十基を数えています。

今回の調査は、このような開発とは少し異なり、国際電信電話株式会社のマイクロ中継所建設に伴うものであります。調査の結果、2基の古墳が確認され、協議を繰り返した後、古墳の重要性を御理解いただいたうえで、古墳を現状保存していただくことになりました。関係者の御協力に深く感謝しています。

今後も、このような個々の事業に対して古墳の保存を計っていく一方で、平尾山古墳群全体の保存と活用方法を考えた、将来に向けての展望と計画を早急に進めていきたいと考えております。関係各位のより一層の御理解と御協力をよろしくお願ひします。

平成2年3月

柏原市教育委員会

## 例　　言

1. 本書は、柏原市教育委員会が、平成元年度に原凶者負担事業として実施した国際電信電話株式会社（代表取締役社長・石井多加三）のマイクロ中継所建設に伴う半尾山古墳群難多尾<sup>かりんどう</sup>畠支群第2支群1・2号墳の緊急発掘調査報告である。
2. 発掘調査は、平成元年12月11日から平成2年1月21日まで実施した。
3. 発掘調査に要した諸費用は、すべて国際電信電話株式会社の負担によるものである。
4. 発掘調査は、柏原市教育委員会社会教育課 安村俊史が担当した。
5. 本書の編集、執筆は、すべて安村が担当した。
6. 本書で使用した方位は磁北、標高はT.P.である。
7. 発掘調査に際して、国際電信電話株式会社、および大日本上木株式会社から、多大な協力を得た。記して感謝する。
8. 調査、整理の参加者は下記の通りである。

竹下 賢 山田寛顧 北野 重 桑野一幸 寺川 欽 菊川秀樹

小西千賀恵 山川正裕

株式会社島田組

## 目　　次

第1章 調査経過.....	1
第2章 周辺の古墳.....	4
第3章 調査成果.....	8
第4章 まとめ.....	20

## 第1章 調査経過

今回の調査は、国際電信電話株式会社（以下KDD）の依頼に基づくものであり、柏原市教育委員会社会教育課が平尾山古墳群雁多尾畠支群<sup>かりんどづばた</sup>1989-4次調査として実施したものである。調査地は柏原市雁多尾畠6338に所在し、調査対象面積は3,590m<sup>2</sup>、調査面積は約370m<sup>2</sup>である。

KDDでは、国際通信サービス向上のため、東京～大阪間を結ぶマイクロ波伝送路の建設が計画されており、そのためのマイクロ波中継所建設が進められている。中継所は約50km毎に必要となり、諸条件を考慮して信貴山周辺がその適地として選定された。1988年9月に、KDDより以上のような計画があるため、建設に際しての埋蔵文化財の状況等についての説明を求められた。柏原市教育委員会では、予定地一帯は平尾山古墳群雁多尾畠支群に含まれ、古墳時代後期の古墳が多数分布していること、しかも、中継所建設の適地と思われる独立丘陵状の地形を呈する場所には、古墳が非常に多いことを説明した。その席で埋蔵文化財の重要性について理解していただき、事前に複数の候補地を選定すること、計画段階で分布調査、試掘調査を実施し、古墳が存在した場合には保存できるような計画を立てること等の意見を出した。

その後、1989年7月に至り、KDDより中継所の候補地として2ヶ所の位置が示された。その1ヶ所には、過去の分布調査では古墳は確認されていないが、他の1ヶ所には、雁多尾畠第2支群として2基の古墳の分布が確認されていた。しかし、両候補地ともに独立丘陵であり、更に多数の古墳が存在することも予想された。そして8月1日に、KDDと改めて協議を行ない、柏原市教育委員会としては、分布調査で古墳の確認されていない前者の候補地のほうが望ましいという意見を述べたが、KDDより、2ヶ所の候補地について十分検討を進めたが、用地取得等の問題から、後者の候補地に絞って検討して欲しいとの回答があった。そこで、予定地には分布調査によって2基の古墳が存在すること、また、この2基以外にも古墳が存在する可能性があることを説明し、事前に十分な調査を実施し、古墳を保存できるような計画にしてもらいたいと説明し、理解を求めた。これに対して、KDDの側からも、古墳は極力保存するので、早急に調査に入って欲しいとの回答があった。

その後、他部局との調整等で時間がかかり、10月26日に、施工業者である大日本上木株式会社と協議を実施した。そこで、大日本上木より、中継所に必要な鉄塔と局舎を建設するためには、相当な規模の造成が必要であり、2基の古墳が存在する位置で、約5mの切土が必要になると説明があった。これに対して、柏原市教育委員会では、分布調査で確認されている古墳が本当に古墳であるか否かを確認することが必要であると考え、発掘調査に着手することにした。調査は尾根筋を中心に、幅1～1.5mのトレチを数本設定して実施し、古墳が確認された場合は調査範囲を拡大する。古墳の保存問題等については、調査が進行した段階で再度検討する。

しかし、保存が不可能な場合や新たに古墳が発見された場合を考えると、調査期間は3ヶ月間必要になるということで理解を求めた。

そして、その当日に文化財保護法57条の2に基づく発掘届出書が提出され、現地の伐栽を行なった後、12月11日より発掘調査に着手した。

調査地は、かなり細い尾根であり、周囲は急斜面となっている。雁多尾畠第2支群1号墳とされる地は、わずかに円墳状の高まりが認められ、古墳か否かの判断に苦しむものであった。

2号墳は石室材と思われる石が露頭しており、横穴式石室の天井石ではないかと予想された。

しかも、1号墳との間には弧状に一段低い部分が認められ、周溝と考えられた。以上のような状況から、2号墳は古墳の可能性が高いと予想された。

調査は主尾根上に幅1.5mのトレーナーを2本、そのトレーナーから派生するように支尾根上へ幅1mのトレーナーを8本設定した。その結果、1・2号墳の周溝と考えられる遺構が確認され、古墳の全面に調査範囲を拡大した。そして調査を進めるにつれ、1号墳は木棺直葬を主体部とし、2号墳は竪穴系小形石室を主体部とすることが、ほぼ確認された。この2基の古墳以外には性格不明の土坑が4基検出されたのみであり、顯著な遺構、遺物は認められなかった。

調査の結果、両古墳ともに墳丘封土の流失は認められるものの、周溝の残存状態が良好であり、主体部も未盗掘と推定され、大阪府教育委員会から古墳を保存するようにとの指導もあったことから、12月27日に大日本土木と協議を実施し、古墳を保存して欲しいと要望した。それを受け、1990年1月8日に、KDD、大日本土木と協議を行なった。

協議において、柏原市教育委員会より調査状況を説明し、古墳の重要性を訴え、保存して欲しいと要望した。それに対して、KDDより、古墳の重要性に鑑み、古墳を保存するべく設計変更したいとの申し入れがあった。そして大日本土木より、古墳より北側のみを工事対象とし、古墳を含めた南側は現状維持を計ると説明があった。計画で予定されていた進入路を建設せず、階段に変更することによって古墳を保存したいという喜ばしい説明であった。しかし、古墳の北側は約5mの切土が予定されているため、施工方法等について、今後も検討を進めていくことになった。またその席で、KDDより、今後の維持管理、公開等についても、できるだけ協力したいとの申し出があり、現状保存される尾根南端より、階段等によって古墳を見学できるようなルートを設定するということを基本的に合意に達した。今後、具体的な方法や費用の負担区分等について協議を進めていくことになっている。

以上のような経過によって、2基の古墳が保存できることになったため、墳丘や埋葬施設の一部の断ち割り調査を実施したのみで、埋葬施設については完掘していない。その後、全面を埋め戻し、1月21日に調査を終了し、3月に、北側の切土は2mとすることで合意した。

KDD、大日本土木の御理解と御協力に感謝したい。



図-1 調査地位置図

## 第2章 周辺の古墳

柏原市の東方山間部は東山と称される。この東山一帯に古墳時代後期の古墳を中心とした平尾山古墳群が存在する。1990年3月現在で、平尾山古墳群の古墳総数は1,259基である。この中には破壊され、消滅した古墳も含んでおり、現存数は1,000基強であろう。また、埋没している古墳がまだ多数存在するとみられ、実数は2,000基近くに達すると思われる。

平尾山古墳群は、1975年度の大坂府教育委員会による分布調査によって、平尾山、本堂、雁多尾畠、太平寺、平野・大県、安堂、高井田、青谷の8支群に分けられている。柏原市教育委員会では、高井田支群は高井田横穴群とし、他の7支群を平尾山古墳群としている。しかし、支群の分割方法や名称には混乱もみられる。特に、平尾山古墳群、平尾山支群、従来使用されていた平尾山千塚の名称がかなり混乱している。平尾山古墳群という名称は避け、地域名をとって東山古墳群とすべきであったと思われる。

今回の調査地は、雁多尾畠支群に含まれる。雁多尾畠支群では445基の古墳が確認されており、1～53支群にグルーピングされている。その中で、調査を実施した古墳は第2支群の1号墳と2号墳であり、第2支群はこの2基のみからなる支群である。

柏原市教育委員会が雁多尾畠支群内で調査を実施した古墳は、14基を数える。まず1980年には、第11支群6号墳の石室内の調査を実施している。石室は右片袖式の横穴式石室であり、金環、土師器壺、甕、椀、須恵器長脚二段透無蓋高杯、台付長頸壺、鉄釘などが出土しており、6世紀後葉頃の古墳と考えられる。石室は、玄室長3m、玄室幅1.8m、玄室高1.9m、羨道長3.7m、羨道幅1.25mを測る。開口方向はS-8°-Eである。現在、市立青少年キャンプ場内にて保存、公開されている。

1982年には、関西電力の鉄塔建設に伴って、第6支群13号墳、第45支群3、4号墳の調査を実施した。第6支群13号墳は直径14mの円墳であり、両袖式の横穴式石室を主体部とする。石室は玄室長4.39m、玄室幅2.03m、玄室高1.85m、羨道長約8m、羨道幅1.34mを測る。床面には石組みの排水溝が作られている。石室内からは、銅製のかんざし、土師器杯、須恵器長脚二段透無蓋高杯・有蓋高杯、台付長頸壺が出土しており、6世紀末葉頃と推定される。第45支群3号墳は、直径10mの円墳であり、無袖式と思われる横穴式石室を主体部とする。石室は半塊状態であるが、現存長3.8m、幅1.15mを測る。開口方向はS-5°-W。石室内から土師器杯、鉄釘が出土している。7世紀前葉頃の古墳であろう。第45支群4号墳は、3号墳の南西に位置し、直径13mの円墳と推定される。墳丘測量を行なったのみであるが、横穴式石室と推定される石材が露出している。第45支群3、4号墳は、調査によって新たに発見された古墳であり、3基ともに、設計変更によって保存されている。

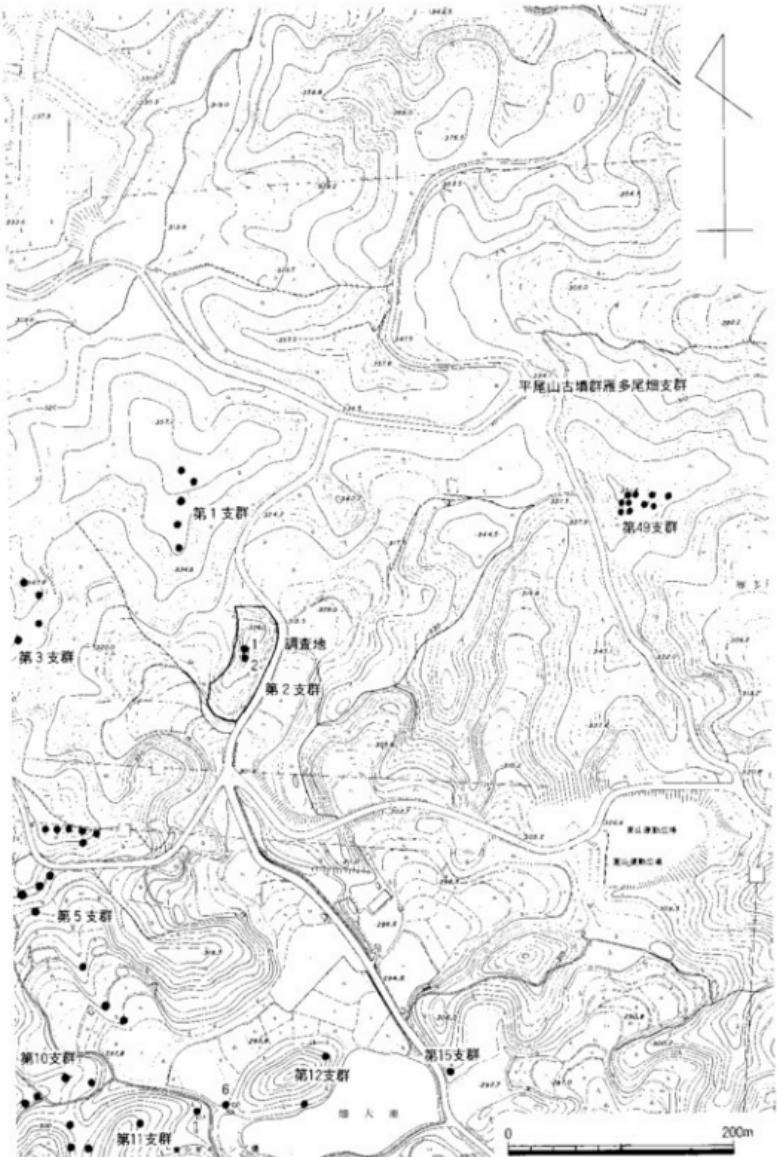


図-2 調査地周辺古墳分布図

1985年には、靈園墓地造成に伴って第49支群1～10号墳が調査された。第49支群は、分布調査では全く確認されていなかった支群であり、新たに設定したものである。墳形が確認できる古墳はすべて方墳であり、最大の10号墳で一辺12mを測る。内部主体はバラエティーに富んでおり、1・3・4・9号墳が狭長な無袖式の横穴式石室、2号墳が木棺直葬、5～8号墳が堅穴系小形石室、10号墳が粘土室木炭葬である。遺物は、金環、頭部鍍金の銅鏡、土師器杯、甕、須恵器杯蓋、杯身、無蓋高杯、台付長頸蓋、鉄釘などが出土している。

1号墳の玄室床面全体に敷石がみられ、小形石室には棺台と考えられる石を伴う。その中で10号墳の特異な構造が注目される。墓塚は長さ5.2m、幅4.8m、深さ2.4mを測り、墓塚底には扁平な石を敷きつめている。石敷の各辺、外周には木炭がおかれ、墓塚壁面を粘土によって築いた後、木枠を組んで、壁面との間に木炭をつめている。天井は板でおおわれていたものと思われる。

1～10号墳は、7世紀代に順次築造されたと考えられ、特異な内部主体を有し、最も規模の大きい10号墳が7世紀末葉頃に築造され、造墓を終了したと考えられる。また、第49支群内では奈良時代の火葬墓が4基検出されており、一族の造墓活動を考えるうえでの好資料である。しかし、残念ながら、第49支群は保存することができず、すべて破壊されてしまった。また、この造成工事に伴って未調査の古墳数基も破壊された。

次に、雁多尾畠支群内ではないが、本年度に実施した関西電力鉄塔建設に伴う調査について、紹介しておく。工事計画では、A・Bの2地点に鉄塔が建設される予定であり、事前に試掘調査を実施したところ、B地点において分布調査では確認されていなかった古墳が発見された。調査地点は平野・大畠支群第23支群にあたり、過去に8基の古墳が確認されているため、第23支群9号墳とした。調査では9号墳の周溝と墳丘裾部を確認したのみである。周溝は、墳丘側に平坦面を有する石材を45°の角度で2段に積んでおり、墳丘外は45°の角度で地山を掘り込んでいる。墳丘内には大小の石材を乱雑に積み上げている。おそらく、標高の低い部分に、墳丘保護のため、封土を盛る際に石材を積んだのであろう。今回調査を実施した雁多尾畠第2支群2号墳にも、この技法が使用されている。9号墳は直径16mの円墳と推定され、横穴式石室の大井石と考えられる石材が2個露出し、その前面には落ち込みがみられることから、南に開口する横穴式石室と推定される。9号墳も、鉄塔の位置変更によって保存された。

以上のように、雁多尾畠支群周辺では第49支群を除いて大規模な調査が実施されていない。また、第49支群を除いて、他の調査では、工事の設計変更等によって古墳を保存していただいている。今回の調査を含めて、保存に協力していただいた方々には深く感謝するものである。それと共に、日本最大の群集墳である平尾山古墳群の重要性に対する認識を深め、群集墳は、群として保存しなければならないという点を強調し、保存が不可能であるような開発には、厳しい構えで望みたいと考えている。

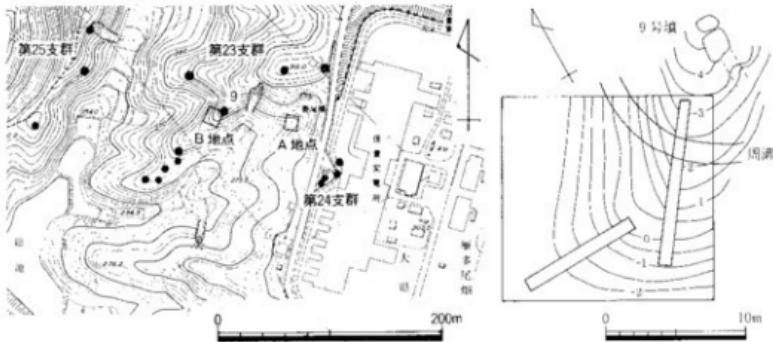


図-3 平野・大県第23支群9号墳位置図

図-4 平野・大県第23支群  
9号墳地形測量図

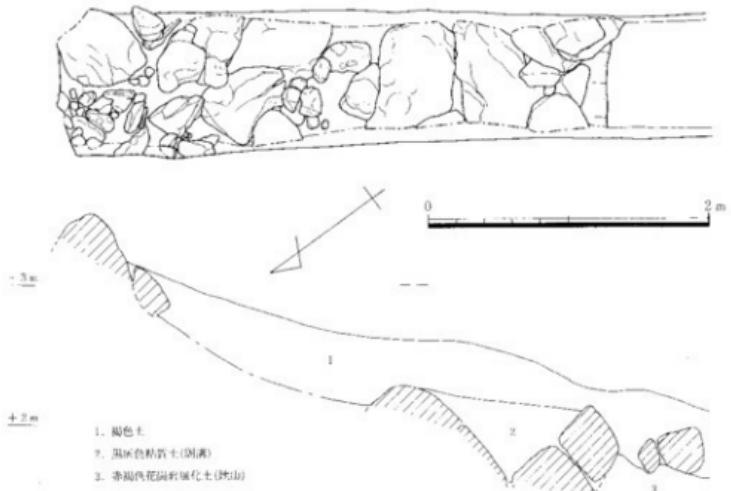


図-5 平野・大縣第23支群9号墳実測図

#### 参考文献

大阪府教育委員会『平尾山古墳群分布調査概報』1975

柏原市教育委員会『柏原市埋蔵文化財発掘調査概要報告・1980年度』1981

柏原市教育委員会『平尾山古墳群一関西電力御坊幹線鉄塔建設工事に伴う』1983

柏原市教育委員会『平尾山古墳群・雁多尾根49支群発掘調査概要報告書一』1989

## 第3章 調査成果

### 1. 概要

調査地は信貴山の南西約2km、関西電力信貴変電所の東約400mに位置し、最高所は標高が328.2mである。地形は南北に長い独立した小丘陵であり、東西約40m、南北約110mを測る。四方ともに急斜面をなし、尾根頂部のみ幅10m弱の平坦面を呈する。平坦面は北側へバチ状に開き、北端で最も広くなる。最高所も、ここに位置する。丘陵全体が雜木林となっている。

1974年度の大坂府教育委員会による平尾山古墳群分布調査によって、今回の調査地で2基の古墳が確認され、平尾山古墳群雁多尾畠支群第2支群1・2号墳（以下雁多尾畠第2支群1・2号墳もしくは1・2号墳と略記）と命名されている。北側の1号墳は、直徑6.8m、高さ0.8mの円墳とされており、1号墳に接して南側に位置する2号墳は直徑7m、高さ1.3mの円墳で、横穴式石室の石材が1個露頭していると報告されている。調査前の状況では、2号墳の石材が確かに露頭しており、南側に平坦面を有する巨石であることから、横穴式石室の渓門部分の大井石ではないかと推定され、円墳状に廻る周溝らしき落ち込みも見られた。1号墳の位置も、若干の高まりが見られ、積極的に古墳とすることはできないものの、2号墳が古墳であるならば、やはり古墳である可能性が高いと考えられた。このように、調査前の観察結果は、分布調査時の所見とほぼ合致するものであった。

調査の主眼は、この2基が実際に古墳であるか否かを確認し、これ以外にも古墳が存在するか否かを確認することであった。地形から考えると、北端の最高所、およびそれに続く南側にも古墳が存在しても不思議ではなかった。そのため、主尾根の北半に長さ45mの第1トレンチを設定する一方、2号墳が横穴式石室であるか否かの確認のため、露頭していた巨石の南側に2m四方のトレンチを設定した。更に、北へのびる支尾根上に第2、3トレンチ、東側斜面に第4、5トレンチを設定した。その結果、1号墳の周溝と木棺直葬と推定される主体部の一部が確認できた。一方、横穴式石室と予想していた2号墳の主体部は、横穴式石室でないことが判明し、巨石3個が並ぶことから、堅穴系小形石室と推定された。また、2号墳の周溝も検出され、1・2号墳が接して存在することが確認された。それ以外では、第2～4トレンチで焼土坑などが検出されたのみで、古墳は確認されなかった。

引き続き、尾根南半の調査に着手し、主尾根に長さ26mの第6トレンチを設定し、東・西・南斜面に第7～10トレンチを設定した。しかし、尾根南半では、全く遺物・遺構は検出されなかった。

その後、2基の古墳の規模、残存状態を確認するため、1・2号墳の周辺のみ全面調査を実施し、耕土は北・南へ搬出し、トレンチを埋め戻した。

1・2号墳は東西約10m、南北約24mの範囲で調査を実施した。表土を剥いだ後、保存協議を行ない、保存可能となつたため、墳丘の断ち割りや主体部の一部断ち割り等を実施した後、埋め戻して現状保存している。

以下、各トレンチ、1・2号墳、土坑の順に調査の概要を記述していく。

## 2. 調査成果

### 第1トレンチ

主尾根北半に設定した幅1.5m、長さ45mのトレンチである。トレンチのほぼ中央で、1号墳の周溝を検出し、それより南側で1号墳主体部、2号墳周溝、主体部を検出している。古墳以外に遺構は認められない。

層序は約15cmの厚さの表土下に、30cm前後の厚さの褐色土が見られ、明黄褐色砂質土の地山に至る。地山は部分的に花崗岩の岩盤が露頭するが、大部分は花崗岩の風化土である。

トレンチ南端近くの褐色土から、瓦器の細片が1点のみ出土しているが、性格は明らかにできない。これ以外には遺物は出土していない。

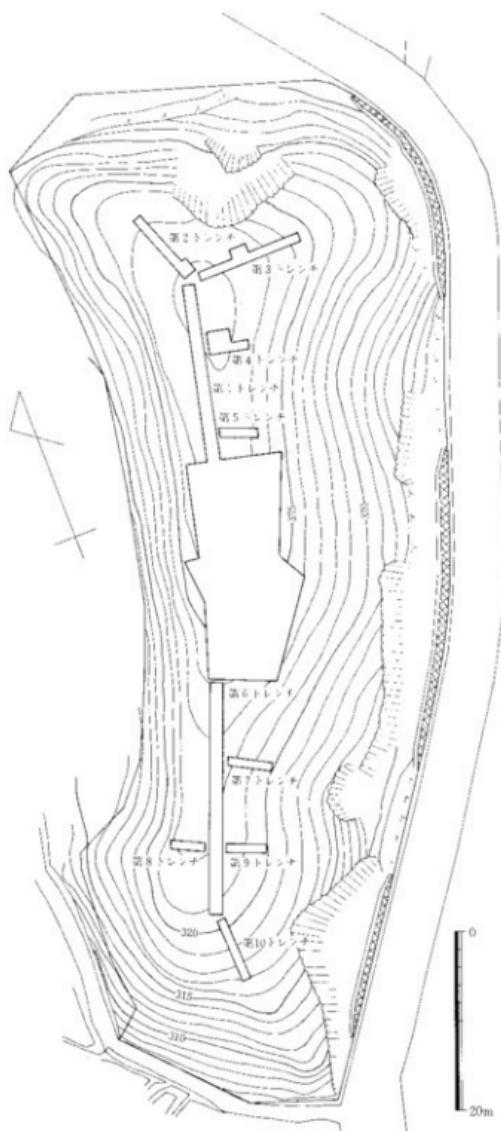


図-6 調査地全体図

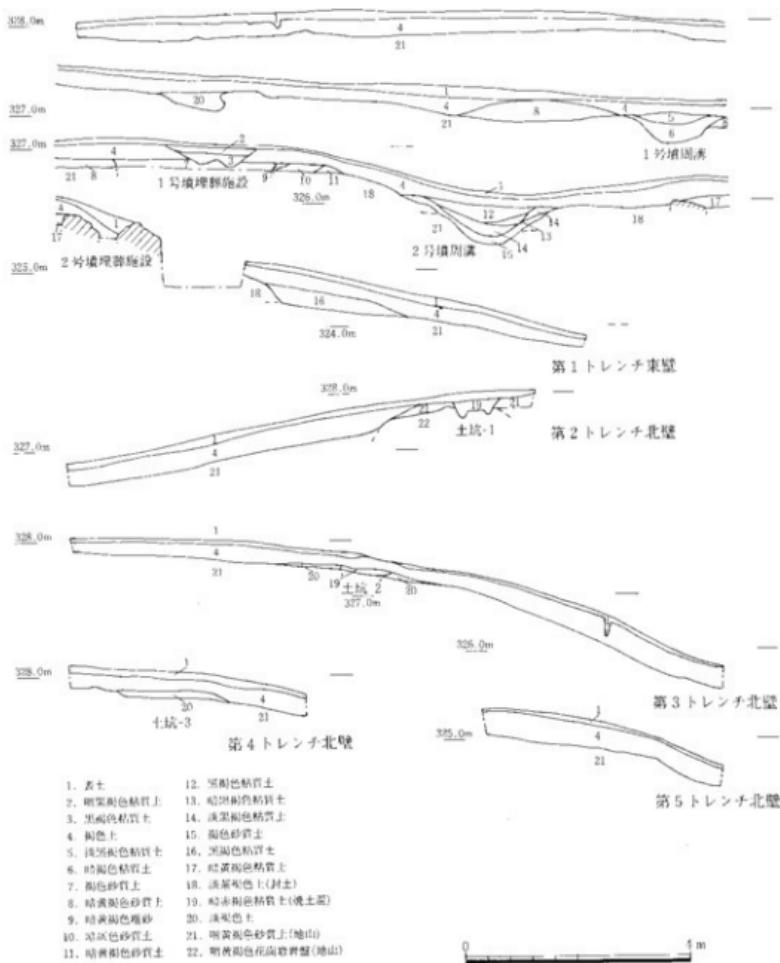


図-7 第1～5トレンチ土層図

## 第2トレンチ

調査地北端に設定した幅1m、長さ9mのトレンチ。地表下30～50cmで地山に至る。南端で焼土坑（土坑-1）を検出、一部拡張を行なった。土坑-1周辺のみ、花崗岩の岩盤が露頭する。遺物は出土していない。

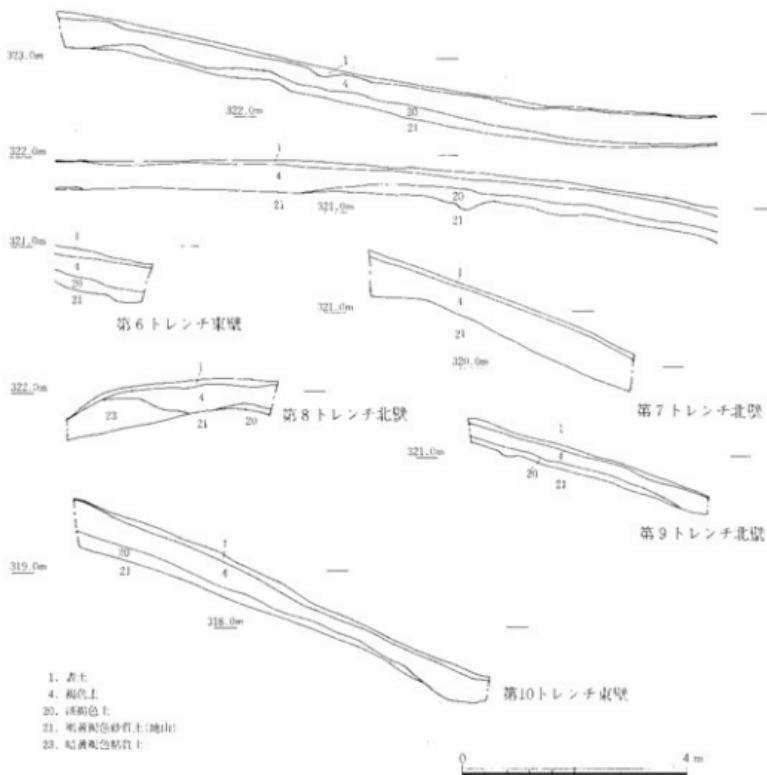


図-8 第6～10トレンチ土層図

### 第3トレンチ

北東部の支尾根上に設定した幅1m、長さ12mのトレンチ。地表下25～40cmで地山に至る。トレンチのはば中央で、やはり焼土坑（土坑-2）が検出され、一部を拡張した。遺物は出土していない。

### 第4トレンチ

東斜面に設定した幅1m、長さ4.5mのトレンチ。地表下約40cmで地山に至る。土坑-3検出に伴い、1.5m×2.5mの範囲を拡張。遺物は出土していない。

### 第5トレンチ

東斜面に設定した幅1m、長さ4.5mのトレンチ。地表下40～50cmで地山に至る。遺物、遺構は見られない。

## 第6トレンチ

主尾根南半に設定した幅1.5m、長さ26mのトレンチ。層序は、上層から表土、褐色土、淡褐色土、明黄褐色砂質土（地山）の順である。地表下50~70cmで地山に至り、地山はトレンチ中央でやや平坦となるものの、緩やかに南側へ下っている。

## 第7トレンチ

東斜面に設定した幅1m、長さ5mのトレンチ。地表下50~80cmで地山に至り、地山の傾斜はかなり強い。

## 第8トレンチ

西斜面に設定した幅1m、長さ4mのトレンチ。地表下60~70cmで地山に至る、トレンチ西半では、褐色土堆積以前に地山の2次堆積である暗黄褐色粘質土が見られるが、性格は不明。

## 第9トレンチ

第8トレンチと対称に、東斜面に設定した幅1m、長さ4.5mのトレンチ。地表下40cm前後で地山に至り、地山は緩やかに傾斜する。

## 第10トレンチ

調査地南端の支尾根上に設定した幅1m、長さ7.5mのトレンチ。地表下40~80cmで地山に至り、地山の傾斜は、かなり強い。

第6~10トレンチでは、遺物、遺構は全く確認されていない。

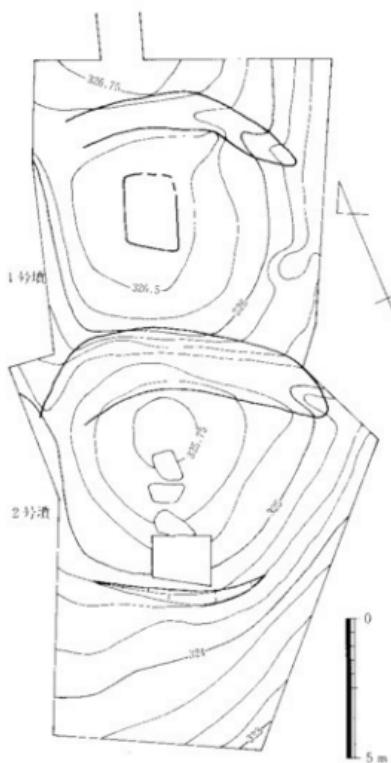


図-9 1・2号墳丘測量図

## 1号墳

墳丘 周溝底から測ると南北約9m、東西約10mの円墳と復元される。周溝は標高の高い北側にのみ廻り、排水を考慮したためか、正円をなさずに東側へ下っている。そのため、墳丘の東部が不明瞭となっているが、やや東西に長い椭円形の墳丘と考えられる。墳丘西側は、後世の地滑りによって損なわれている。墳丘南側は、2号墳の周溝によって1~1.5m削られていると推定される。

墳丘は20~40cmの厚さの表土、褐色土を除去すると確認される。周溝周辺の残存状態や地山の傾斜角度から考えると、1m近くの墳丘封土が流失していると予想される。しかし、人為的な削平の痕跡は見られないため、自然流失したものであろう。

古墳の築造は、まず地山の整形から始められたようである。自然地形をそのまま利用するのではなく、主体部周辺では地山を平坦に整形している。その後、周溝を掘削し、周溝を掘削した際の排土（暗黄褐色砂質土）は周溝の両側になだらかに積み上げられている。周溝南側に積まれた排土は、そのまま封土として利用されており、周溝北側に積まれた排土は周堤のように使われた可能性を考えられるが、平面的には明らかにできなかった。

その後、墳丘南端に暗黄褐色砂質土、暗灰色砂質土などが盛られ、墳丘全面に淡褐色土が盛られる。主体部の掘削は、その後に行なわれたようである。

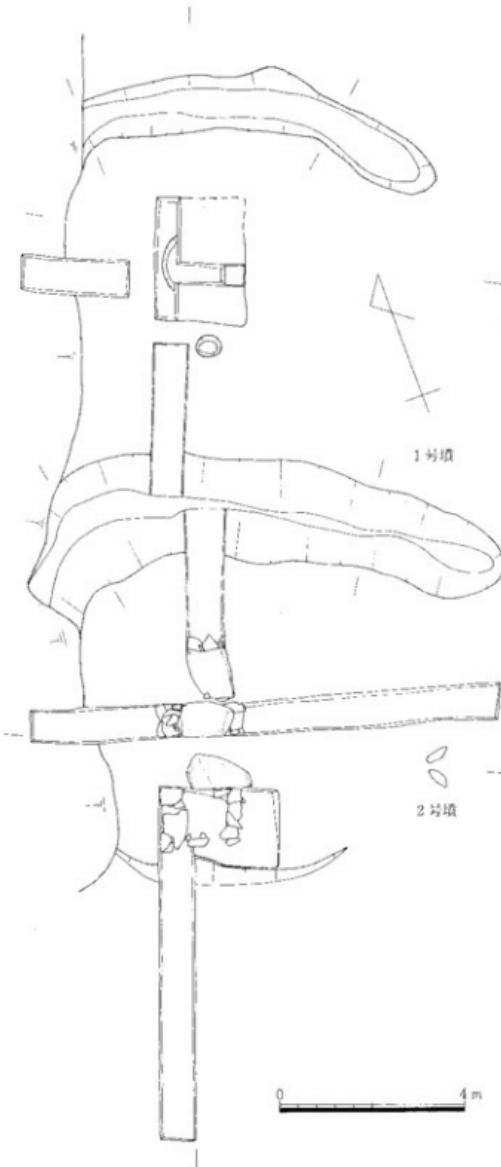


図-10 1・2号墳平面図

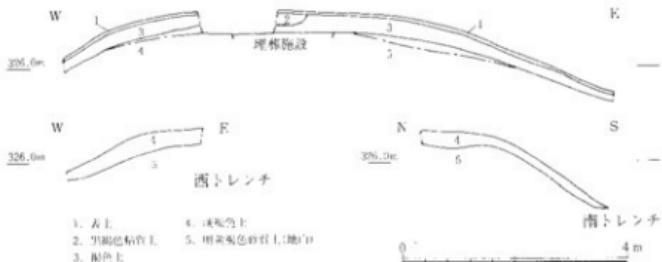


図-11 1号墳墳丘土層図

しかし、現状では墳丘の北側から東側にかけては地山が露出しており、淡褐色土の盛上状況は不明である。地山が見られない墳丘の西側と南側を断ち割ったところ、20~40cmの厚さで淡褐色土が見られ、その下で地山に至る。

**周溝** 周溝は1~1.2mの幅で緩やかな弧を描いて墳丘北側にのみ認められる。西側は地滑りによって削平されている。東側は徐々に浅くなり、墳丘北東部で消滅している。周溝は、古墳築造に先立って、地山整形後に掘削されたものと思われる。

周溝断面はU字状を呈し、上層は北側では下層に暗褐色粘質土、上層に淡黒褐色粘質土がみられ、北西部では淡黒褐色粘質土の単一層、北東部では下層から地山ブロック、褐色砂質土、淡黒褐色粘質土の順にみられる。暗褐色粘質土と褐色砂質土は、墳丘、および墳丘北側の土が流れ込んだものと考えられ、古墳築造後、間もなく堆積したものであろう。その後、滲水等によって有機質に富んだ淡黒褐色粘質土が長年月をかけて堆積したものであろう。調査前の状況からは、周溝の存在を予想させるものは見られなかった。

周溝底は、北西端で最も高く、北から北東部へと徐々に低くなる。北西端との比高差は、北で約10cm、北東端で約80cmとなる。周溝が北西から北東へと低くなっている点と、墳丘北側、すなわち標高の高い側にのみ周溝があげている点から考えると、周溝は墓域を西すると共に、雨水等を墳丘に影響を与えることなく排水することを目的として掘削されていると考えられる。雨水は墳丘東側へ排水されており、そのため、北東端部が正円状をなさず、やや開き気味に、東側へのび、排水の機能を高めることを考慮したものと思われる。なお、墳丘南側については、2号墳の周溝に切られているため、周溝が存在したのか否か不明である。

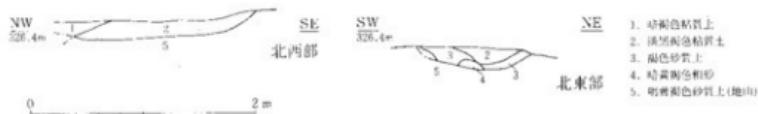


図-12 1号墳周溝上層図

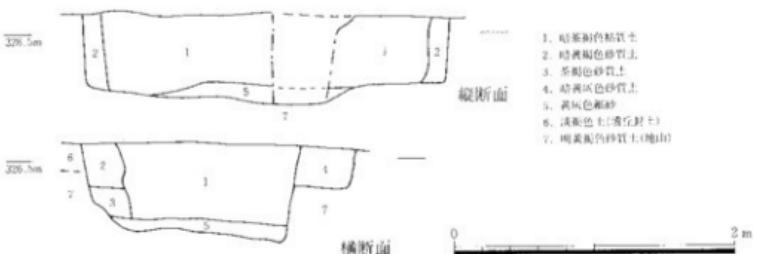


図-13 1号墳埋葬施設断面図

**埋葬施設** 墳丘の中軸線と推定される位置に、墳丘中央よりやや北側に寄って埋葬施設が存在する。長方形平面を呈し、上面での長さ270cm、幅200cmを測る。主軸の方位はN-21°-Eである。形状等から木棺直葬と推定されるが、北東隅部に巨木の樹根が存在すること、保存が可能となったことから、一部にトレンチを設定したのみで、全形を把握できていない。

トレンチは横断面確認のため、埋葬施設のはば中央に幅50cmのトレンチを設定した後、縦断面確認のため、西辺に沿って、やはり幅50cmのトレンチを設定した。その結果、最も深い部分の現状での深さは79cmであった。また、東側壁は、約30cmの深さまではば垂直の壁面をなし、約38cmの広さのテラス面を経て、更に約40cmの深さまで約80°の傾斜で掘り込まれていることが判明し、いわゆる二段墓塚の形状となる。それに対して西側底面では円弧状の浅い段が見られるのみである。この段は不明瞭であり、明らかに東側壁とは異なる。また、北壁、南壁も、ほぼ垂直面をなし、東側壁のようなテラスは見られない。したがって、東側のみ、二段墓塚状を呈していたと考えられる。

埋土は、最下層に、ほぼ全面にわたって黄灰色細砂が見られる。これは、墓塚掘削後、木棺安置に先立って、墓塚床面を平坦にしたものと思われ、あるいは除湿機能も考えられる。木棺の推定位置には暗茶褐色粘質土が見られるが、木材の痕跡は見られず、木棺の形態、規模共に不明である。暗茶褐色粘質土の周囲には、木棺を安定させたと考えられる暗黄褐色砂質土などが20~40cmの幅で、ほぼ垂直に見られる。埋土からは箱式の木棺と推定されるが、トレンチ内からは鉄釘や副葬品は全く出土していない。

**遺物** 1号墳に伴うと考えられる遺物は、ほとんど出土していない。わずかに、墳丘封土観察のために設定したアゼの交点、すなわち墳丘中心部の表土から上部器の小形壺の細片が1点出土しているのみである。頸部の破片であり、2号墳周溝出土の小形壺に類似する形態と思われる。これ以外には、墳丘上の表土から剝離痕の見られるサヌカイトの原石が1点と、瓦器の細片が1点出土しているのみである。周溝内や埋葬施設内からは、全く遺物が出土しておらず、1号墳の年代は決め難い。

## 2号墳

**墳丘** 墳丘の北側にのみ周溝が見られ、南側は裾部で若干の整形が行なわれている。周溝や裾部の形状から判断すると、南北8.2m、東西約9mの円墳になると考えられる。1号墳と同様にやや椭円形を呈し、規模もほぼ等しくなる。墳丘の西側は地滑りによって最大1.4m程度抉られている。東側は墳丘裾が不明瞭であるものの、自然石2個が見られる位置が裾部と推定される。自然石は共に50cm×20cm前後の大きさであり、墳丘封土上の流失を防ぐために据えられたものと考えられる。埋葬施設の南側でも、墳丘内に多数の自然石、割石が含まれており、同様の性格を有するものと考えられる。

調査前から埋葬施設の石材が一部露出しており、封土はかなり流失しているようである。表上、褐色土を除去すると天井石3石が検出されていることから、1m近くの封土が流失したものと考えられる。

築造に際しては、1号墳と同様に地山の整形から始められる。墳丘中心部周辺では、325.2m～325.4mに、ほぼ平坦に削平され、墳丘南側の地山が低い部分には削平された土が盛られたと考えられる。第9層暗黄褐色砂質土は、その一部であろう。更に南側に若干の盛土がなされた後、埋葬施設が築かれたと推定される。埋葬施設は、若干地山を掘り込んで築かれている。埋葬施設がほぼ完成した状態で、茶褐色粘質土が約40～50cmの厚さでほぼ全面に盛られている。その後、葬送儀礼が行なわれ、埋葬がなされたのであろう。

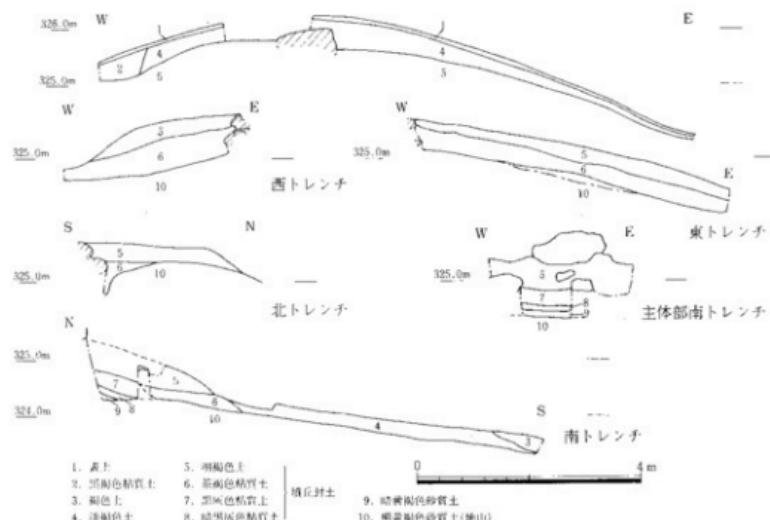


図-14 2号墳墳丘土層図

埋葬終了後、天井石3石が架構され、明褐色土で覆って墳丘が完成する。この間に周溝の掘削が行なわれているのであるが、その時期を明確にし難い。1号墳と同様に、地山整形後に周溝が掘削されたかと想像されるが、かなり深い周溝であるにもかかわらず、周溝の掘削土を墳丘に盛った痕跡が確認できない。あるいは、茶褐色粘質土が、これに対応する土であるのかもしれない。

**周溝** 墳丘の北側にのみ見られ、北から西にかけては弧状をなすが、東側は直線状にのびて消滅している。西側は地滑りによって削られている。幅は北西部で最も広く、260cmを測り、北から東にかけて、徐々に幅を狭めている。現状での深さは北側で最も深く、約90cmを測る。周溝底の高さは、北西端で最も高く、北から東へかけて低くなる。比高差は北で約10cm、北東端で約70cmとなる。

2号墳の周溝も、1号墳の周溝と同様に、北側からの雨水等を、墳丘に沿って東側へ排水していたものであり、周溝の形状、周溝底の比高差等も酷似する。ただ、2号墳の周溝は約90cmの深さを有し、非常に残存状態が良好である。墳丘封土の流失等を考慮に入れて、本来から2号墳の周溝のほうが深かったと思われる。

埋土は、最下層に墳丘の流失土と考えられる褐色砂質土が堆積し、その上層に有機質の黒褐色系の粘質土が堆積している。基本的には、1号墳の土層と同一である。

2号墳の周溝は、1号墳の墳丘に切り込んでいるため、2号墳が1号墳より新しいことを示している。また、周溝の上層から少量の遺物が出土している。

**埋葬施設** 積穴系の小形石室と考えられる。天井石が3石残っており、現状保存を計るために内部の調査は行なっていない。しかし、石室の四方に設定した墳丘断ち割りのトレーナーで、ほぼその構造、規模が推定できる。石室は30cm前後の自然石や割石を乱雑に積み上げて構築されている。側壁は3~4段に積まれており、おそらく石室内部の壁面は不揃いであると考えられる。天井石は3石残っており、当初から3石であったと推定される。天井石は、いずれも、120cm×80cm前後の大さりであり、自然石である。調査前からその一部が露出していた南端の1石は、やや南側へ移動しているようである。斜面の低い側に滑ったためであろう。石材は、いずれも花崗岩である。主軸はN-21°-Eを示す。

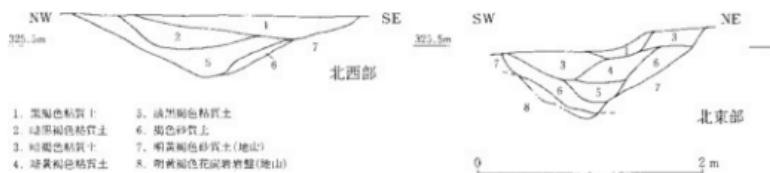


図-15 2号墳周溝土層図

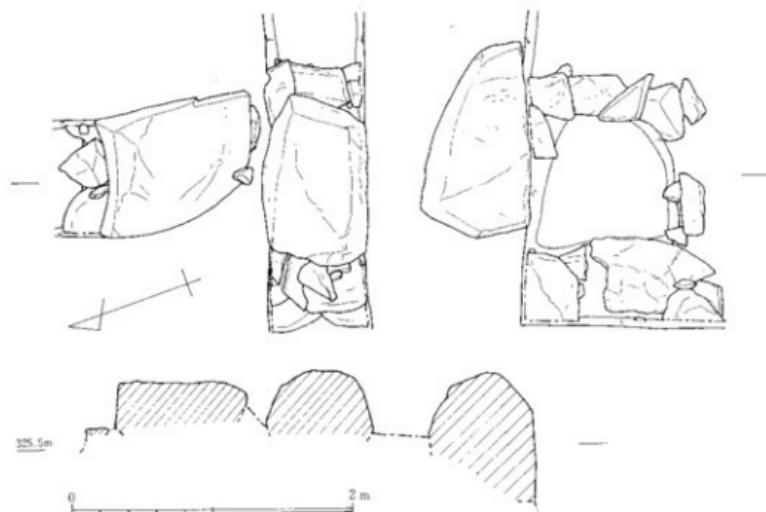


図-16 2号墳埋葬施設

石室の規模は、内法で長さ240cm前後、幅80cm前後と推定される。高さは60cm前後であろう。天井石まで残っている堅穴系の小形石室は珍しく、未盗掘であろう。しかし、平尾山古墳群などで見られる一般的な堅穴系小形石室は、平坦面をもつ石を立て、2~3段に積みあげて構築されるものであり、2号墳のように小形の石材を乱雑に積み上げたものではない。あるいは、2号墳の石室は、堅穴系小形石室の先駆的な形態であるのかもしれない。

**遺物** 墓丘北側の周溝最上層である黒褐色粘質土から須恵器の杯身と、土師器の小形壺が出土している。杯身は口縁部を欠損しているため、全形を知り得ない。受部は短く、ほぼ水平にのびるようである。6世紀後葉頃か。小形壺は推定口径8.0cmを測る。体部最大径は頸部直下に位置し、口縁部は頸部からほぼまっすぐに立ち上がる。口縁端部は内傾する面をなす。口縁部ヨコナデ、体部外面はナデと指頭押圧、内面はナデ調整である。

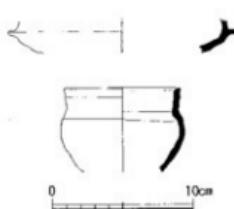


図-17 2号墳周溝出土遺物

これ以外には、周溝上面や墓丘東麓、南裾部などから土師器の小片が出土している。また、1号墳と同様に、サヌカイトの原石も出土している。

図化した2個体の遺物は、周溝最上層から出土しているため、2号墳に伴うものと断定できない。1号墳の墓丘上、あるいは埋葬施設上面に置かれていたものが転落した可能性も十分に考えられるものである。

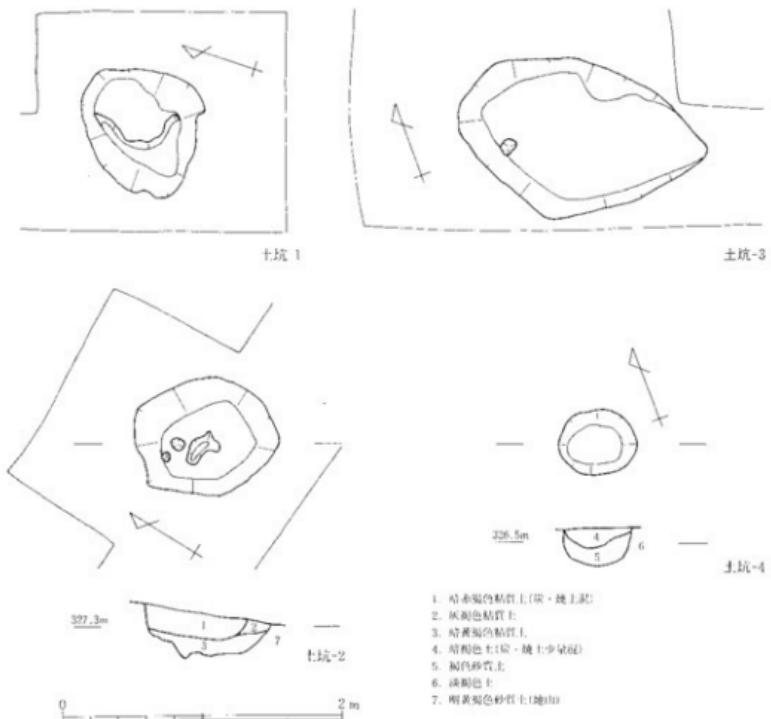


図-18 土坑実測図

### 土坑

**土坑-1** 第2トレンチ南端で検出。直径90cm前後の円形平面を呈し、底部は西半で一段下がっている。深さは最も深い部分で約30cmを測る。埋土は暗赤褐色粘質土であり、炭、焼土を多量に含んでいる。

**土坑-2** 第3トレンチで検出。直径約80cmの円形平面を呈し、深さは約40cmである。底部には、杭状のものを立てたと考えられる小穴が3個見られた。土坑は、掘削後に半分まで埋められ、南端に少量の焼土を含む灰褐色粘質土が見られ、暗赤褐色粘質土には多量の炭、焼土を含み、壁面、および灰褐色粘質土との境面が熱を受けて赤変している。

**土坑-3** 第4トレンチで検出。長径360cm、短径110cmの椭円形平面を呈し、深さは最大18cmである。埋土は淡褐色土である。

**土坑-4** 1号墳の埋葬施設南側で検出。直径50cmの円形平面を呈し、深さは32cmを測る。暗褐色土には、焼土を含んでいる。土坑からは、いずれも遺物が出土していない。

## 第4章 まとめ

雁多尾畠第2支群1・2号墳について調査を実施したが、出土遺物が非常に少なく、年代を決め難い。少量の遺物から、敢て年代を考えるならば、6世紀後葉～7世紀初頭頃であろう。また、1・2号墳は接して築かれており、2号墳が1号墳の墳丘を若干削り込んでいる。更に、墳丘の形態、規模、埋葬施設の主軸がほぼ一致することから、両古墳は極めて強い関係を有し、しかも、あまり時期を離てずして築かれたと考えられる。

両古墳の異なる点は、埋葬施設の構造と周溝の規模である。この2点から見れば、2号墳のほうが優位であるといえる。また、両古墳とも、埋葬施設の構造から一人のみを埋葬していると考えられる。以上のような事実から考えると、1号墳に妻、2号墳に夫を埋葬した夫婦墓ではないかと考えられる。夫婦墓と考えられる例は、雁多尾畠第19支群や田辺古墳群にも見られる。ところが、他の例と異なり、雁多尾畠第2支群は2基のみの築造で造墓活動を終えており、その前後に続く古墳が存在しない。1号墳の北側には、古墳築造が可能な平坦面が残っているにもかかわらず、古墳は築かれていません。1・2号墳の被葬者の次世代は、古墳築造が不可能となるほど衰退したのか、もしくは造墓域を他所へ移したのか、結論は出せないであろうが、あれこれ考えると興味が尽きない。

埋葬施設についても、1・2号墳は重要な資料を示してくれた。従来、平尾山古墳群、およびその周辺では、7世紀中葉～後葉まで横穴式石室が築かれ、その後、堅穴系小形石室に移行し、それと同時期か、やや遅れて木棺直葬墳が出現すると考えられていた。しかし、少量の遺物による年代からではあるが、1・2号墳は遅くとも7世紀初頭と考えられ、従来の埋葬施設の変遷には一致しないものである。もっとも、木棺直葬は伝統的な葬法であり、存在しても不思議ではない。また、2号墳の堅穴系小形石室は、一般的の石室と石の積み方等で異なっているため、堅穴系小形石室の先駆的な形態と考えてよいかもしれない。そこには、堅穴式石室の形態と、横穴式石室の構築技法の両者が見出せる。このように両古墳を理解しておきたいが、重要な点は、両古墳とともに特定個人のためだけの古墳であるという点である。この時期には、一般には横穴式石室が築かれ、追葬によって複数の人が埋葬されている。それが7世紀前葉～中葉に至って、戸首等の個人墓となるために堅穴系小形石室が出現していくと理解されている。つまり、1・2号墳では、個人墓としての古墳築造が、非常に早い時期になされていたということである。

このような考えも、1・2号墳の年代が7世紀中葉以降に下ることになれば、全く成立しなくなるのであるが、類例の確認等、今後も注目していく必要がある。平尾山古墳群の性格は、調査を重ねる毎に、混沌としてくるように思われる。

# 図 版

図版 1  
調査前状況



1号墳



2号墳



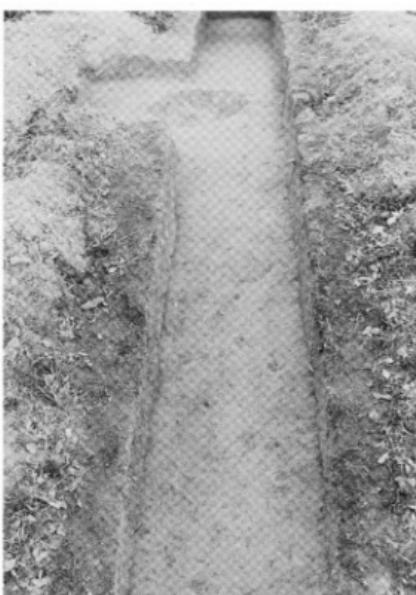
北から



南から



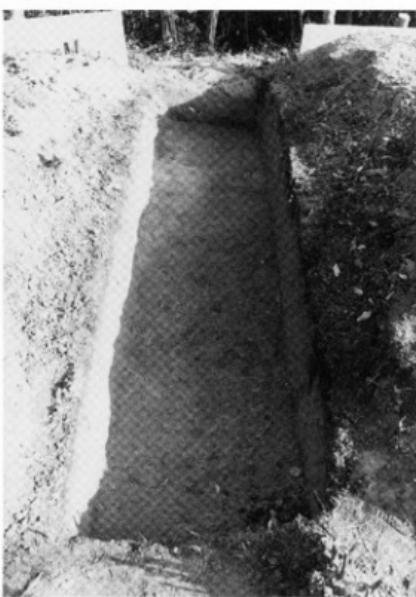
第2トレンチ



第3トレンチ



第4トレンチ



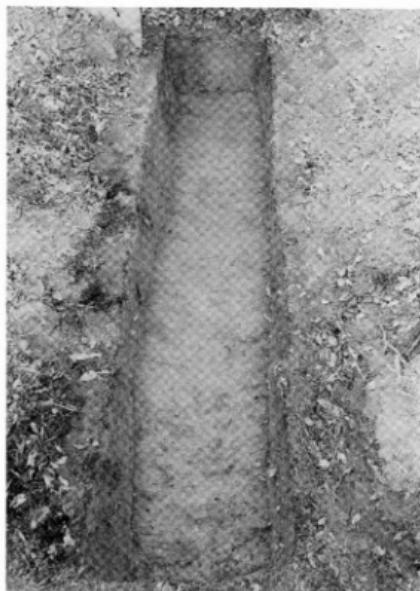
第5トレンチ



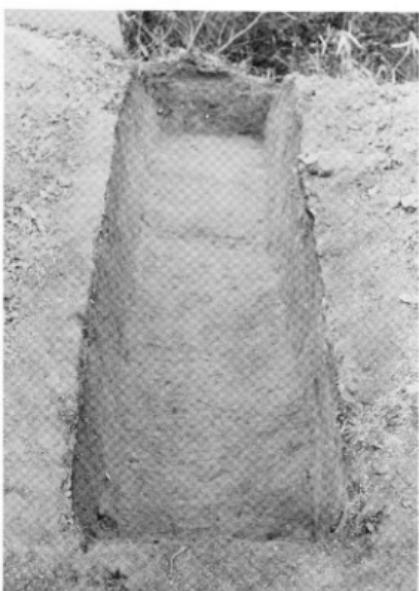
北から



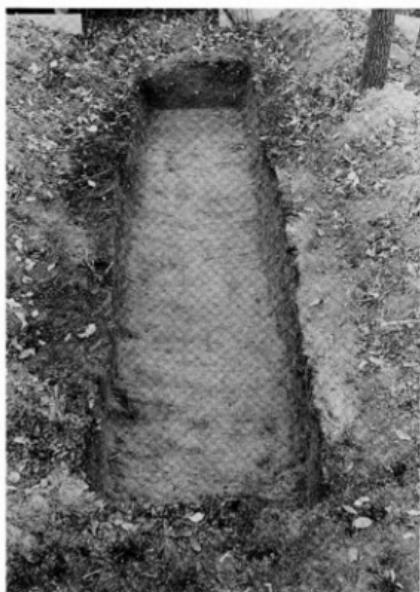
北から



第7トレンチ



第8トレンチ



第9トレンチ



第10トレンチ



検出状況（北から）



周溝掘削状況（北から）



周溝北側土層



周溝北西部土層



周溝北東部土層



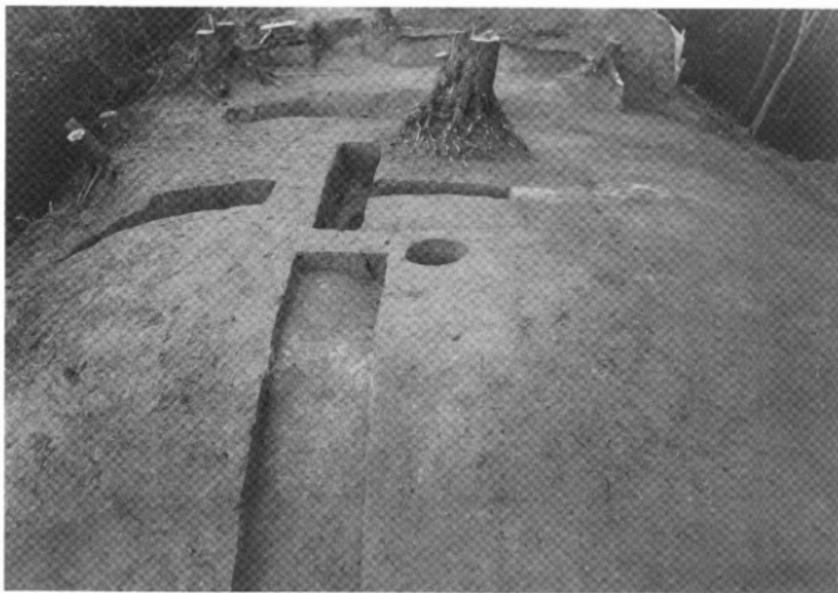
完掘状況（北から）



完掘状況（南から）



断ち割り状況（北から）



断ち割り状況（南から）



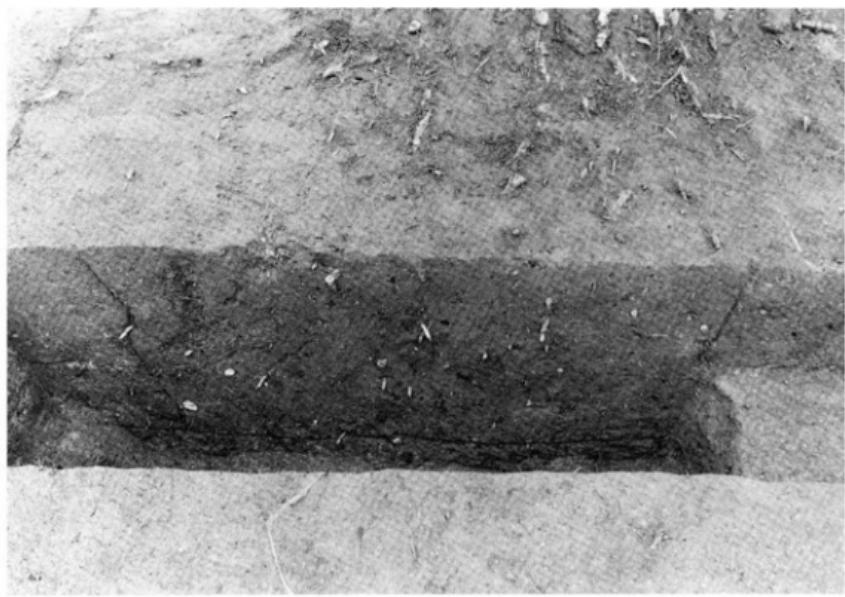
西トレンチ



南トレンチ



埋葬施設横断トレンチ



埋葬施設横断面



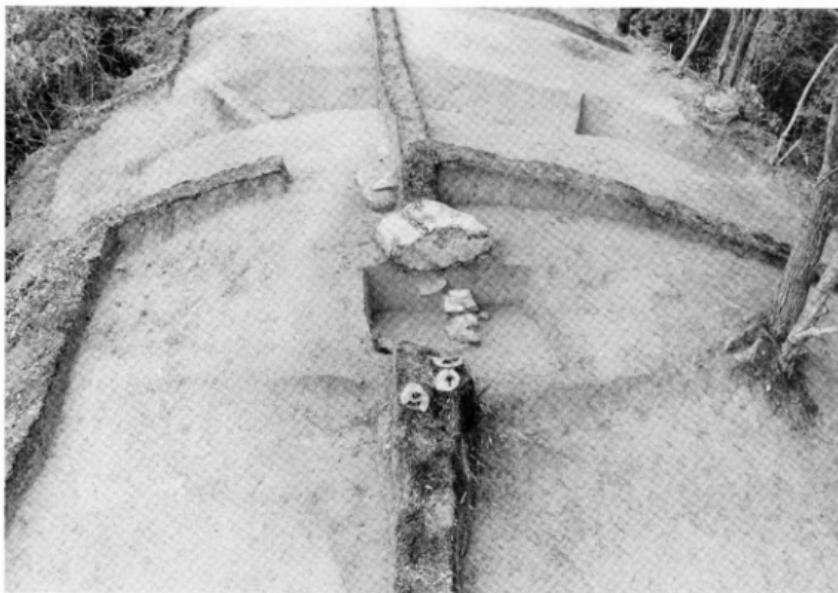
埋葬施設トレンチ



埋葬施設断面



検出状況（南から）



周溝掘削状況（南から）



周溝北側土層



周溝北西部土層



周溝北東部土層



完掘状況（南から）



埋葬施設（南から）



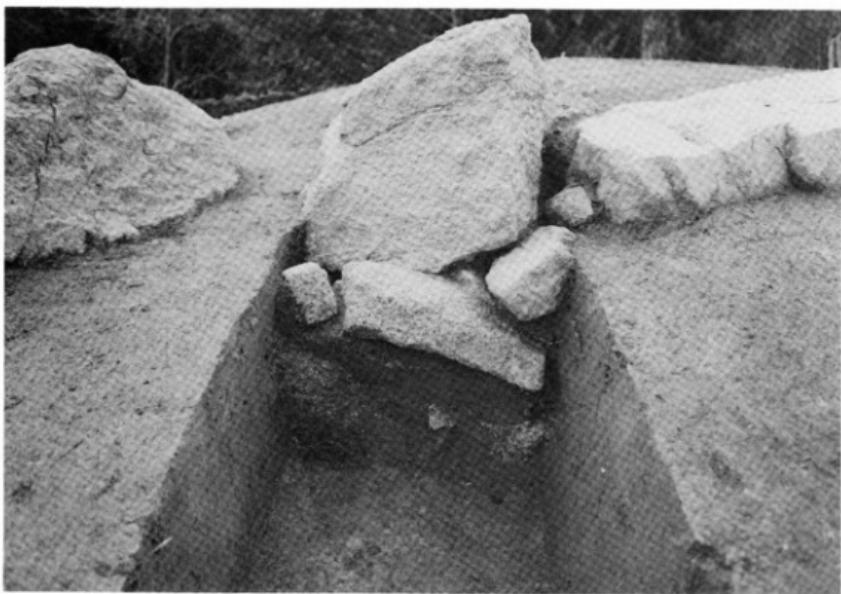
断ち割り状況（南から）



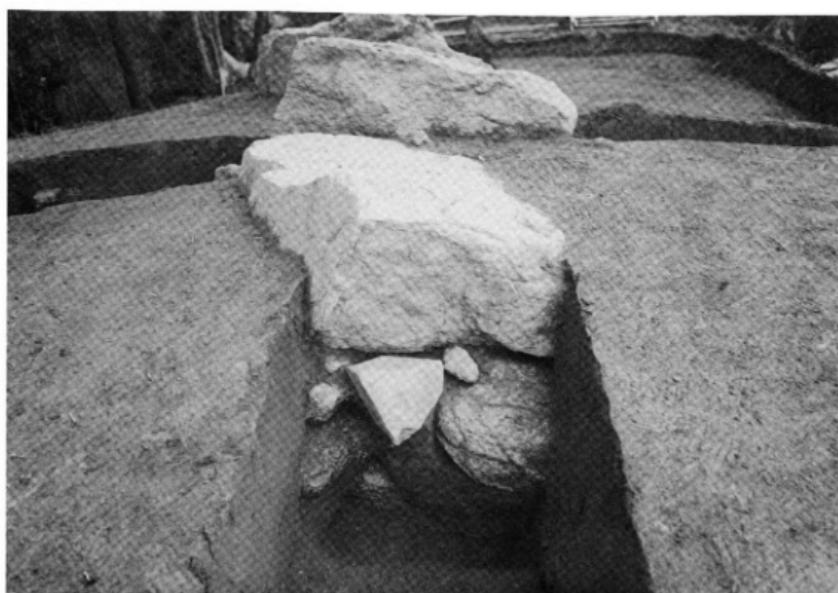
断ち割り状況（南から）



西トレンチ



東トレンチ



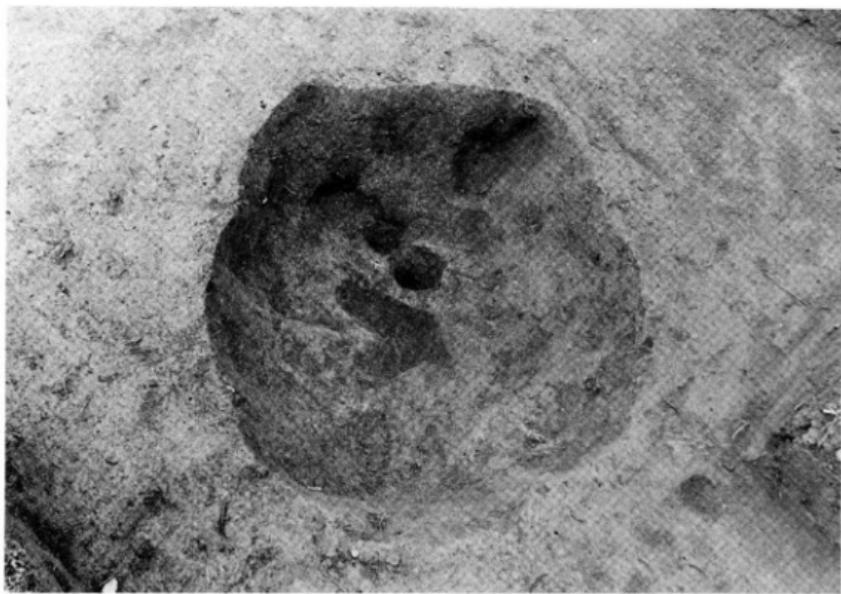
北トレンチ



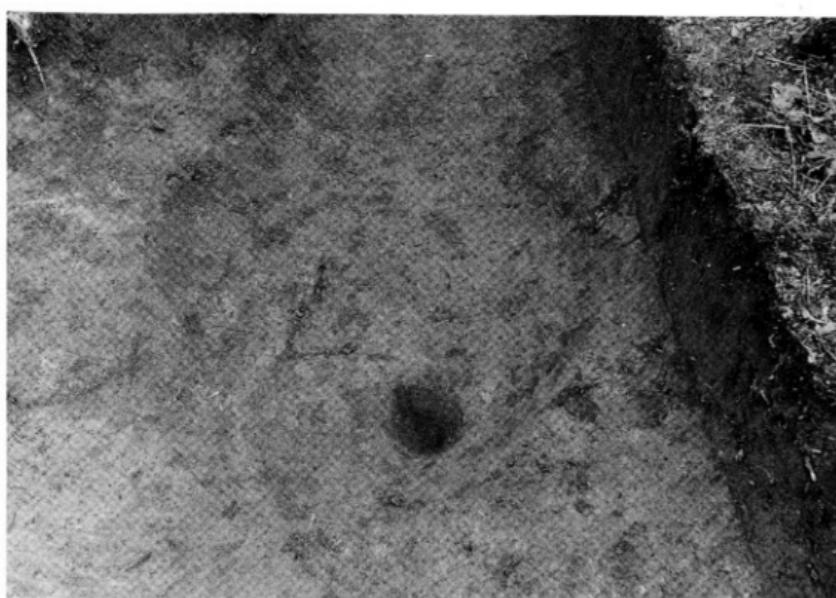
南トレンチ



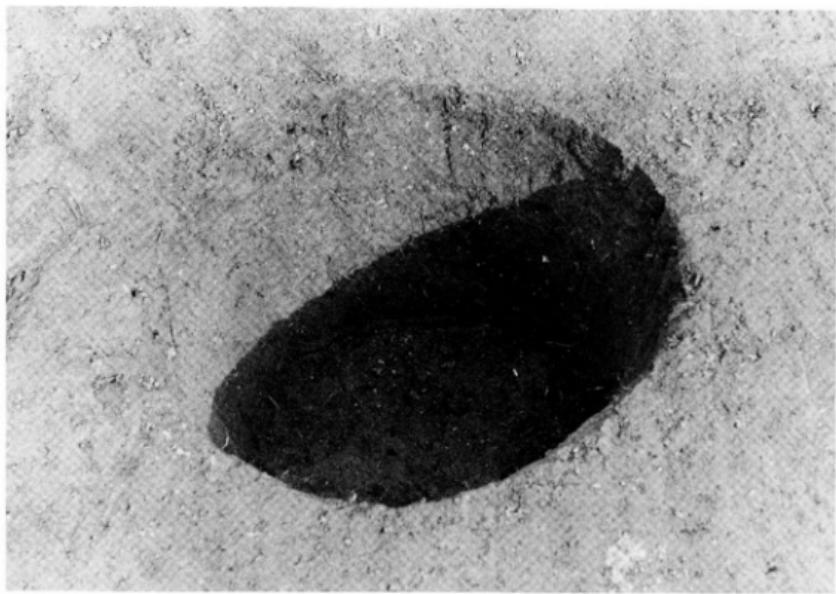
土坑—1



土坑—2



土坑—3



土坑—4

平尾山古墳群雁多尾畠第2支群

編集・発行 柏原市教育委員会

〒582 大阪府柏原市安堂町1番43号

電話 (0729) 72-1501 内5133

発行年月日 平成2年3月31日

印 刷 株式会社 中島弘文堂印刷所

